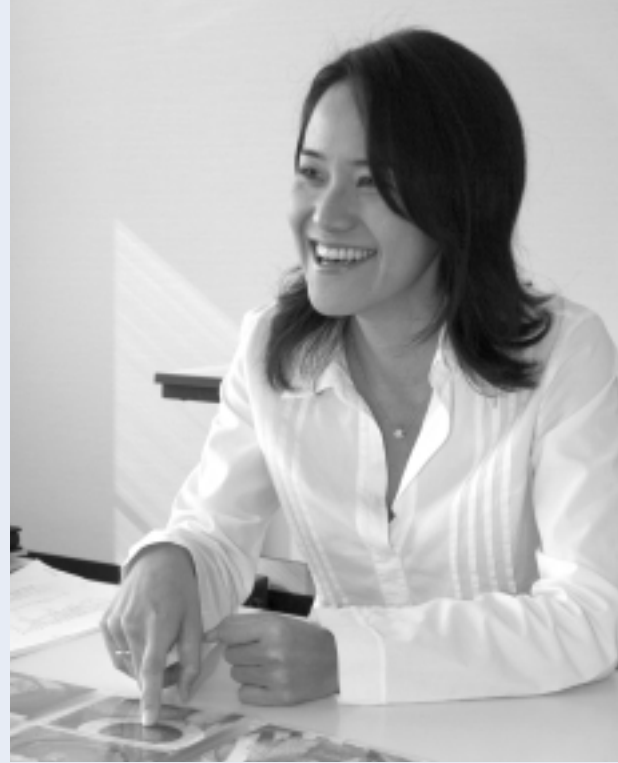


# シリーズ ひと

## 「助けに行ったつもりが 皆さんに助けられました」

すぎさき さちこ  
杉崎 佐知子さん

白岡東在住。看護師。平成16年12月～平成18年12月まで青年海外協力隊派遣事業で西アフリカのブルキナファソで医療活動を行った。



現地で医療活動をする杉崎さん

杉崎さんは中学2年生の時、アフリカで働く助産師のドキュメント番組を見て、「こんな仕事がしたい」と漠然と思ったという。その後看護師になり、しばらくはそんな思いを忘れていた。25歳の時、タイに観光旅行に行く際、トラブルで飛行機が飛ばず急遽宿泊したホテルで偶然にアフリカの番組を目にした。それから徐々にアフリカへの思いがつのり、アフリカ行きを決意し、青年海外協力隊派遣事業に応募した。

そして、みごと試験を突破し希望どおり派遣先がアフリカに決まったが、そのときはブルキナファソという国を知らなかったという。

ブルキナファソは、ガーナの北側に位置する内陸国で、北部はサハラ砂漠に接している。鉱物などの資源はほとんどなく水不足等の環境条件から、海外の企業が進出してくることは見込めない。

一般家庭の月収は日本円で6,000

0円程度だが、医療費は、健康手帳作成代20円、診察料20円、注射一本100円程度と決して安くはない。市街地の裕福な人たちは診察を受けられ治療できるが、村の人たちは診察を受け病名がわかっても薬が買えず、薬草を煎じて飲んでるのが実状だ。その上、衛生教育が不足しているため、ささいなけが（切り傷ややけど）やマラリア、下痢などの病気で重症化し、死に至ることがある。

そんな現地での医療活動は、予防がメインになってくる。「マラリアの一番の予防は蚊に刺されないことです。蚊帳を使うのがいいのですが、村人たちは一夫多妻制の家族が多いため、1家族でいくつもの蚊帳が必要になります。しかし、家族全員分の蚊帳を買うお金がないんですよ」と語る。

ブルキナファソの人々は、豚、羊、鶏などの家畜と隣りあわせて生活している。また、下水道の整備もされていないため、街のいたるところに家畜の糞や汚水がためられていて、それが病気の感染源になっている。

「日本で学んできた医療は使えないことが多く、けがをしたときの救急処置を教えたり、診療所と小学校で衛生教育をしたりなど病気の予防を中心とした啓発活動を行いました。ブルキナファソでは、高度医療よりも環境・衛生教育が重要なのです。」と現地での体験を話してくれた。

しかし、現地で学んだことも多かったという。「ものがないからこそ、一つのを分けあおうというよう



な人を思いやり、気遣う気持ちや、貧しく厳しい生活をしているの心がとても豊かなことに驚きました。援助に来たつもりが助けられたり教えられるりすることがほとんどで、とても良い体験になりました。」と目を輝かせた。

今後については、「現地では何がなか、自分で何ができて何が足りないかが今回の活動を通してわかったので、日本でもっと勉強して、もう一度アフリカに行って支援活動してみたいです。」と力強く語ってくれた。



子どもたちに大人気の杉崎さん。右側のやけどを負っている子どもも今では完治し元気になっている。